# スペイン艦隊のイギリス遠征

## ―ロサリオ号のプリマス沖放置事件の真相―

岩　根　圀　和

1.

スペインのカンタブリア海に臨む港コルーニャは、およそ北緯43度21分、西経8度24分に位置する。大西洋方向へ西北西に湾口を大きく開いた良港であるが、湾外へ茫洋と広がる海洋の波は荒い。21世紀に至っても、何万トンものタンカーが嵐に遭遇してまっぷたつに裂ける座礁事故を起こし、スペインの北岸一帯を重油で真っ黒に染め、その一部がイギリスにまで流れ着いた衝撃は記憶に新しい。ましてや16世紀の帆船にとって強風の吹き荒れる冬場は言うにおよばず、比較的穏やかな夏場でも航行の難しい危険な海域であった。スペイン艦隊（通称、無敵艦隊）の130艘が出撃した1588年6月の気候は例年になく荒れ模様で、老練なパイロット（航海士）にも風向きの予想がつかなかった[1)]。事実、リスボンを出撃した5月にはまるで12月のように強風が吹き募って海が荒れていたのである。当時の帆船は構造上、波に揺り上げられ船体を軋ませるたびに横板の間に詰めてある槙皮（まいはだ）が摩擦で徐々に吐き出されてくる。波濤を乗り越えて航海を続けていると、ついには誇張ではなく手の幅ほどの隙間ができて沈んでしまうのが帆船の宿命であった。リスボンからコルーニャまで荒海の中を3週間も航行してきたスペイン艦隊にも槙皮を詰めて補修を必要とする艦船が多数にあった。しかもすでに4月から船積みしている食料と水には腐敗と傷みが生じている。新鮮な食

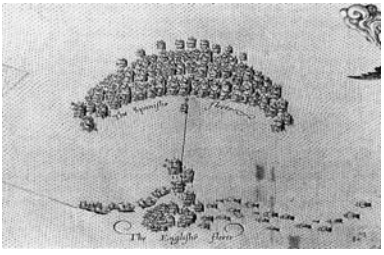
糧を洋上で補給するはずの手配に齟齬が生じ、予定になかったコルーニャへ艦船の一部を入港させざるを得なかった。その夜に猛烈な嵐が艦隊を襲った。土地の漁民すらも「6月にこの嵐は見たことがない」と言う。それもそのはずで、気象研究によれば、この年の天候はローマ時代以降、西ヨーロッパにもっとも悪天候が接近した時期にあたっていたのである。誰にも予想のつかない長期にわたる天候不順の年であった[2)]。スペイン国家の総力を結集した艦隊遠征がそのような年に巡り合わせたのは、国王フェリペ2世の最初のつまづきであったと言えるだろう。ともあれスペイン艦隊総司令官メディナ・シドニア公が、国王フェリペ2世の指令に反して6月19日に食糧補充の目的でコルーニャへ艦隊の一部をすべり込ませたのは賢明なる英断であった。港へ入りきれなかった艦船の中には、その夜の嵐で四散してイギリスのシリー諸島まで流された船もあった。フェリペ2世のもとへ現状報告の急使が飛ばされる。国王は不吉な報告に眉をひそめるが成す術もない。嵐と戦うために艦隊を派遣したのではないのだから誰の責任でもないと諦めて成り行きを神に任せるしかなかったのである。

このまま季節が進めば航海にますます危険が伴うばかりか、食料が傷み、飲料水が欠乏し、しかも大艦隊の維持に毎日3万ドゥカードが消えてゆく。だがマドリッドにあるエスコリアル宮の執務室から、水の溜まった膝をさすり、痛風に傷む手を庇いながら矢継ぎ早に指令書を送って出撃を急がせるフェリペ2世の焦燥をよそに、艦船の補修、食料の補充、病人の手当、その他諸々の準備を整えて再度の出撃態勢が完了するのに一ヶ月を要した。良風を待って7月21日の真夜中に抜錨、四散した艦船のコルーニャ集結を待って艨艟（もうどう）130艘の陣容を立て直し、水夫と兵士3万を搭載し、武器弾薬と6ヶ月分の糧食を船底に満載して22日の早朝には南西の微風を受けて出港したのである[3)]。慎重に船同士の距離を

保ってカンタブリア海に浮かび出た巨大艦隊が午後6時にはオルテガ岬を回って針路をイングランドへ取った[4)]。そのままほぼ北東微北に針路を維持すれば順風に運ばれてイギリスのシリー諸島かリザード岬あたりへ到達するはずである。幸い西の微風が数日間続き、スペイン艦隊は29日には早くもリザード岬を遠望している。スペインにすればいよいよ敵の領域に踏み込んだわけである。総司令官メディナ・シドニア公以下の幕僚に緊張が走る。

7月31日、夜明け、北西の風、潮は西方向である。イギリス海峡では早朝から昼までは西へ、午後からは東へ強い潮流が走る。やがて艦隊左舷前方にプリマスが望める。急を知ったイギリス艦隊が80艘ばかり、すでに昨夜のうちにプリマス港を出てスペイン艦隊の後方へ回り込んで風上に位置を占めている。帆船同士の戦いでは風上の位置を占めるのが有利に戦うための絶対条件である。さらに11艘ほどが風上へ間切って背後へつけようとしている。本隊の80艘へ合流するつもりらしい。風上へ楽々と切りあがって行くイギリス艦船の船足の軽快さを見たスペイン人たちは驚いた。詰め開きで風上へ自由に航行でき、攻めるも引くも極めて速く、危険と見ればすばやく風上へ逃げ去る。後の戦闘でスペイン艦隊がこのイギリス船の軽快さに煮え湯を飲まされ、敵船を1艘も捕らえることができずに地団駄を踏んで悔しがることになるのであるが、このときはまだそれだけの実感が湧かなかった。メディナ・シドニア公が航海日誌に敵艦船の船足の早さを書き留め、そのかたわらで艦長バネガスが敵の操船技術を誉める言葉を記すだけの余裕がまだあったのである[5)]。スペイン艦隊は幅約4マイルに渡って三日月形あるいは鷲が翼を広げた形に編隊を組んでドーバー方向へ整然と東進していた。メディナ・シドニア公座乗の総旗艦「サン・マルティン」を中心とした主力部隊が正面を固め、その前をガレアサ4艘（帆と櫂で進む戦闘艦）が先導

する。戦列艦は互いに50歩ほどしか離れていない。油断をすれば僅かの突風でたちまち衝突事故を起こしてしまう。それだけに高度の操船技術を要する陣営である。イギリス側から見て右翼と反対の左翼には艦船が梯形状（ハシゴ形編成）に展開して航進し、ひとたび戦闘となれば中央部にいる輸送船団を即座に警護する戦陣を取れる態勢にある。舷側を向いている大砲はこの陣形では効果を発揮しないので攻撃形とは言えないが、単縦陣の戦列をとるイギリス艦隊は、よほど意を決してこの大編隊の内へ入り込む戦術を採らない限り攻撃を仕掛けるのは不可能である。この時代にまだそれだけの戦術があるはずもなく、危険きわまりない暴挙となってしまうだろう。要するにイギリス艦隊には手が出せない。スペイン艦隊は金城鉄壁の防衛陣形をとってイギリス海峡へ突入してきたのである。だが外からは整然と航進しているように見えるスペイン艦隊にも、ひとたび内部へ入れば玉石混淆の艦船にそれなりの問題があった。その最たるものは風上へ航行の難しい鈍重なウルカ（輸送船）の存在であった。船足の遅いところへもって他の船がすべてその速度に合わさなければならず、しかもひとたび戦闘となれば深刻な足手まといとなりかねない事実である。艦隊の総指揮をあずかるメディナ・シドニア公にとって頭痛の種であったが、もとよりイギリス側からはこの難渋をうかがい知ることはできない。その壮大な規模の陣容に慄然としたハワード提督が「敵は強力なのであえて敵艦隊の中へ入るのは避けた[6)]」と国務長官ウオルシンガムに一報を送り、ウインター卿は「とても見事な編隊であったと言えます」と率直な感想を述べている[7)]。



ヨーロッパの歴史始まって以来の偉容を誇る大艦隊がこうして刻々とプリマスへ接近している。イギリスとしてはスペイン艦隊を絶対にプリマスへ入港させてはならないのである。宣戦布告は風上にあったイギリス艦隊ハワード提督からなされた。これを受けたスペイン艦隊は総旗艦「サン・マルティン」の合図で帆を絞り、一斉に風上へ回頭してイギリス艦隊と対峙した。まだ艦隊としての明確な戦術展開をもたないイギリスは、ひとまず全体をふたつに分け、ハワード提督がそのひとつを隷下におき、残りをドレイクの指揮下においた。そしてハワードの旗艦「アークロイヤル」麾下の艦船が単縦陣でスペイン艦隊右翼にいるアロンソ・デ・レイバの旗艦「ラタ」の前面を圧迫する戦術に出る。これを迎え撃つ「ラタ」の面前で「アークロイヤル」は左へ転舵して右舷の砲を発射する。互いの隷下の艦船も同様の戦法を取ってたちまち熾烈な砲撃戦が展開されたのである。

イギリス海岸寄りに位置するスペイン艦隊の左翼では、ドレイク隷下の艦隊がやはり単縦陣でマルティネス・デ・レカルデ提督の後衛隊に接近していた。こちらの方がプリマスに近いので一層の守りを固めねばならない。司令官レイバの旗艦「ラタ」の鼻先を牽制しながらもハワード提督がこのときドレイク隊の支援へと艦隊を北へ進めたのは賢明な判断であった。あたかもレカルデの旗艦「サン・フアン」が帆を絞って右舷に回頭し、船首を北西微北へ向けたところへドレイクの「リベンジ」が回り込んでくる。おかげで船首を「リベンジ」の舷側に突き込む形となったので「サン・フアン」は舷側の大砲が効かない。逆にドレイク側からは絶好の標的となって砲火を浴びる結果となってしまった。急を知ったメディナ・シドニア公が総旗艦「サン・マルティン」に転舵を命じ、主力を率いて救援に駆けつけるとドレイクはすばやく撤退していった。

イギリス海峡の入り口で双方あわせて 200 艘ばかりの帆船が砲撃戦に

入るという人類史上初めての海戦であったが、実際にはこれだけの小競り合いで終わった。長さにしてほぼ2時間の戦闘であった。総旗艦「サン・マルティン」の艦長アロンソ・バネガスは、この間にスペイン側が放った砲弾を720発、イギリス艦隊は2000発以上を撃ったと記録している[8)]。実に2,720発の砲弾がイギリス海峡を飛び交った計算だが、実害はレカルデの旗艦が前檣に2発被弾し、策具と支索を破損しただけであったことを思えば砲撃の効力はほとんど無かったと言える。もっとも、全艦隊を指揮下に収めて機能的に戦闘配置につける作戦意図はもとより迅速な命令伝達手段も持たない時代のことであれば、お互いに連携した効果的な戦果を期待するのは難しい。しかも初めての砲撃戦はそのほとんどがめくら撃ちであった。照準装置すらまだ未発達な時代である。波に揺れる甲板に半ば固定された大砲から放った砲弾が、500メートル以上はなれてやはり波に浮動する敵船にあたるのはむしろ奇跡に近い。砲弾の数に驚くことはないのであって、鉄球や石弾が飛び交うだけの初期の砲撃戦ではこれが普通であった。だがこのときの戦闘には直接参加しなかった後方部隊のスペイン艦船で悲劇的とも言うべき事故が2時間のうちに相次いでふたつも起きていたのである。

2.

事故のあらましについては、まず艦隊総司令官メディナ・シドニア公から国王フェリペ2世へ提出された「航海日誌」を参照するのが順当であろう。それによると先述の小戦闘があった7月31日の午後のことである。

「ドン・ペドロ・デ・バルデスの座乗艦（アンダルシア艦隊副旗艦Nuestra Señora del Rosario　わがロサリオの聖母。以下ロサリオ）

が僚船「カタリーナ」と絡まり、船首斜檣と前檣を破損した。ドン・ペドロは修復のため艦隊の中央へ合流させた。わが艦隊は敵の風上に出ようと午後4時まで操作をしてみた。このときオケンド隊の副旗艦の火薬庫から出火、甲板2層と船尾楼が吹き飛んだ。…メディナ・シドニア公はこの艦が後方に残されていくのを見て転回して救助に向かった。他の船にも同様にするよう砲声で合図を送った。それからオケンド隊の船の救助に伝令船を派遣した。火災は広がり、オケンド隊に襲いかかろうとしていた敵船は、メディナ・シドニア公の総旗艦が救援に向かうのを見て方向を転じた。そこで船は救われ、艦隊に再び編入された。この操船の間に「ロサリオ」の前檣が折れて主檣桁に落ちかかった。メディナ・シドニア公は再度船足を止めて太綱を渡してやろうとした。しかし懸命にやってみたが風と悪天候に阻まれて果たせなかった。「ロサリオ」は遅れ始め、ディエゴ・フローレス（参謀長）がメディナ・シドニア公に進言して、すでに夜でもあるし、ほとんどの船が先へ進んでいるので総旗艦がここで減帆のうえ事故船に随走しても僚船はそれに気づかずに先へ進んでしまう。翌朝には艦隊の半数ぐらいしか残っていないだろうと言うのだった。敵艦隊のすぐ近くで縮帆減速すれば日数を無駄にすることは確かである。そうやって艦隊全体を危険にさらすべきではないとのディエゴ・フローレスの考えである。この意見を入れたメディナ・シドニア公は、甲板へ太綱を渡して曳航するか、あるいは乗員を避難させるためペドロ隊の副旗艦とフローレス隊の旗艦に減帆を命じるべく伝令船4艘の派遣をオヘダ隊長に指令した。しかしながら夜間でもあったし、悪天候と荒波のせいでそのどちらも果たせなかった。そこでメディナ・シドニア公は航進を続け、次の日に何が起こるかわからないのでそれにそなえて艦隊を集結させた[9)]。」

事故の大きさにくらべて記述が簡潔に過ぎるかも知れないが「航海日誌」であるだけにこれでも詳しく述べてあると言える。同じ事故をフェリペ2世に報告した書簡ではもっと素っ気ない。「航海日誌」がフェリペ2世の手元に届くのは8月21日であるから、これに先だって国王はまずこの報告書簡の簡潔な文面で事故を知ったはずである。

「同日、ドン・ペドロ・バルデスの旗艦が僚船と衝突して船首斜檣と前檣を破損し、艦隊は遥か先へ進んでいたので追いつくことが出来ませんでした。この旗艦は艦隊から置き去りにされることになったので、敵艦隊の手に落ちたに違いないと思われます。ロンドンからの情報によると、バルデスは捕虜になっているとのことであります。同じ日、オケンド隊の副旗艦が火を発し、乗員は脱出したが船の鎮火は出来ませんでした[10)]。」

スペイン艦隊はひた押しに東へ航進していたので、前衛にいた「ロサリオ」と「カタリーナ」はプリマス沖戦闘のときほぼ先頭を走っていたことになる。ところが戦闘合図によって全艦隊が西へ転舵回頭したため必然的に殿艦となり戦闘現場からもっとも遠い距離に置かれてしまった。先頭へ出た総旗艦「サン・マルティン」は風上へ間切ってハワード、ドレイクを追っていたのでますます両船から離れて行く。したがって熾烈な戦闘中に後方で起こったこの事故をメディナ・シドニア公が目撃する余裕はなかったろうし、双方の間に幾艘もの艦船が介在していたので見えるはずもなかったのである。だが報告を受けたメディナ・シドニア公は救援活動の指示を的確に下達していると言える。航海日誌を読む限りにおいて最高司令官としてのメディナ・シドニア公の下令に過ちがあるとは思えないのである。海が荒れて太綱が渡せなかったのも事実であろ

う。気象研究によれば、31 日には確かに低気圧が接近して厚い雨雲が広がり西北西の風が強まっていたのである。

フェリペ 2 世へ提出された正式な「航海日誌」ではあるが、自分の都合のいい方向へメディナ・シドニア公の恣意が働く余地があると言える。であれば客観的立場に立つ人物として、総旗艦「サン・マルティン」のアロンソ・バネガス艦長はこの事故をどう見ていたのか。絶えずメディナ・シドニア公の傍らにいた人物である。幸い報告記録がある。それによるとオケンド隊「サン・サルバドール」の爆発事故を記した後にこう述べている。

「このときペドロ・バルデスの旗艦が僚船「カタリーナ」と衝突して船首斜檣と前檣の帆を破損し、修理のために本隊から遅れ始めた。…旗艦の前檣が折れて三角帆の帆桁に落ちかかって帆を破損してしまった。隊を離れて救助要請の大砲を何度か放った。メディナ・シドニア公はガレアサ「スニガ」(大型戦闘艦）に太綱を渡すように命じた。ペドロにとって運の悪いことにこのとき少し風が起こって波が高くなった。このため太綱を渡せなかった。メディナ・シドニア公は総旗艦を回頭させて太綱を渡そうとした。…海上での助言を受けるようにとの陛下の指令でディエゴ・デ・フローレスを（総旗艦に）座乗させていた。この人物が言うには、すでに時刻も遅い現在、旋回してペドロの救援に向かうと艦隊が遅れるとのことであった。すでにあの船は右舷に傾いている。メディナ・シドニア公は、ペドロの船が操船不能であるなら、乗員を移して沈めるようにパタチェ（小型の伝令船）を数隻さし向けるように命じた。ペドロのもとにはパタチェ 1 艘が来ただけだった。…この船は 500 名と大砲 50 門、艦隊の経費 5 万ドゥカードを積載していた。…しかるべく手をうっていれば敵の手に落ちることはなかったろう。プリマスへ曳航

されたと知った。」

　メディナ・シドニア公の「航海日誌」には見られない具体性があって臨場感が伝わってくる。まず総司令官は艦隊ではもっとも船足の早い、しかも強力な戦闘艦であるガレアサに救助を命じている。イギリス艦隊が周囲に群がって隙を窺っている戦場での救出作業であれば、最大級の戦闘艦をさし向けるのは妥当な判断であろう。少し離れた位置にいたガレアサ「スニガ」を急遽呼び寄せて救助指令を出したのである。しかし悪天候のせいで曳航用の太綱、つまりロープを渡せなかったと言う。事故船「ロサリオ」は 1, 150 トン、50 門の大砲を搭載した艦隊でも 4 番目に大きな花形の主力艦船である[11)]。600 トン級の「スニガ」でも海が荒れてロープが渡せないとなると他の船では手の施しようがない。ましてや木の葉のように翻弄されるパタチェのごとき伝令船では、敵に包囲された状況で乗員を救出するのは不可能に近いのが現実である。艦隊全体を危険に陥れるべきではないとの航海参謀ディエゴの助言を入れてメディナ・シドニア公は、ついに「ロサリオ」の救援活動に見切りをつけて東へ転針した。メディナ・シドニア公の身近にいたバネガス艦長は、救援活動の経緯を余すところ無く客観的に報告していると評価できるだろう。ただ最後に「しかるべく手をうっていれば敵の手におちることはなかったろう」と批判めいた言葉を書き記しているのが気がかりである。だが他にしかるべきどのような手があったと言うのか。事故船を見捨てねばならないバネガス艦長に人道的な慚愧の念があったに相違いない。僚船を救えなかった無念さが思わず漏れたような言葉に思えるのだが、その心の内を推し量るすべはない。翌朝、「ロサリオ」はドレイクに降伏してイギリスへ曳航されていった。スペイン艦隊は何事もなかったかのように東進を続けたのである。

ここに主任監察官として総旗艦に乗船していたホルヘ・マンリケから国王フェリペ2世への報告書があるが、意外なことにこれが驚くほど大雑把でしかも不正確である。

「同日、ドン・ペドロ・デ・バルデスの旗艦が僚船と絡まり船首斜檣を破損、前檣にも被害を受けた。艦隊はその船を敵の前に残したまま通過、あの船と艦長がどうなったかは不明であります。またミゲル・デ・オケンドの旗艦が被弾、幾人かが火傷を負った。船は沈みそうだったので積み荷を運び出し、翌日の8月1日に依然として風上に立って当方を追尾していた敵船の眼前で沈没しました[12)]。」

救助活動についてはまったく触れていない。むしろ救助をせずに見捨てたかのような書き方をしている。またオケンドの旗艦は被弾ではなく火薬庫の爆発事故であり、敵前で沈没したのではなく「ゴールデン・ハインド」でウエイマスへ曳航されたのである。爆発の原因については、火薬が湿っているのをこっぴどく叱責されたドイツ人砲術士が腹いせに火薬庫へ火縄を投げ込んだとする説があり、また砲術士の妻を隊長が誘惑したからだとも言われる。いずれも憶測に過ぎないのだが、不幸にしてもっとも多量の火薬を積載していた船であった[13)]。爆発船を視察したハワードとホーキンズは「甲板は焼け崩れ、舵機は壊れ、船尾は吹き飛んでいる。50名ばかりが火薬の火傷で目を覆うばかりであった。船には悪臭が満ちて」手足や首のない死体があたりに転がっていた。あまりの惨状に早々と退船したと述べている[14)]。

メディナ・シドニア公の総旗艦「サン・マルティン」の船上から直接に救助活動の経緯を目撃したひとびとの報告は以上のごとくである。では他の船からはこの事故をどう見ていたかの報告は乏しいが、たとえば

所属は不明だがルイス・デ・ミランダが簡潔な報告を残してくれている。

「ペドロ・バルデスはフアン・マルティネス・デ・レカルデに会って被害状況を知りたいと思った。そのとき僚船「カタリーナ」が前を横切ろうとして衝突、ペドロの旗艦の船首斜檣を破損した。その結果、前哨が主檣へ落ちかかって操船がきかなくなった。メディナ・シドニア公に援助を要請し、何らかの手段を講じて乗員と国王の資金を移すからそれまで待ってくれるように依頼した。メディナ・シドニア公は太綱を渡すためにガレアサを1艘、そして乗員救助にパタチェを多数送るように命じた。しかし海が荒れていてどうしようもなかった。艦隊ははるか先へ進んでいるし、敵は半レグアばかりの位置に追尾してくるので旗艦の方へ舳先を回せなかった。…敵の手に放置することになった。夜とともに事態が見えなくなっていた[15)]。」

このすぐ後にオケンド隊の爆発事故を記しているのだが、この報告から事故が起こった状況が新しくわかる。戦闘でレカルデの船が2発被弾したのはすでに述べた。その被害状況を知りたくてペドロは船をそちらへ回そうと操船していた。そこへ「カタリーナ」が後ろから回り込むような形で「ロサリオ」の船首に衝突したのである。船首斜檣を破損すると風上へ航行できなくなる。ペドロにしてみれば艦隊内部の安全な位置へ入って補修の時間を稼ぎたかった。メディナ・シドニア公も事故船をガレアサで艦隊内部へ曳航すべくロープを渡そうとするのだが荒波のために果たせなかった。艦隊全体の安全と時間を無駄にしてはならないと言う国王フェリペ2世の厳命を遵守すべく、メディナ・シドニア公はやむえず「ロサリオ」を切り離したのである。全体のために個を犠牲にしたと言えば聞こえはいいが、総司令官メディナ・シドニア公にしてみれ

ばこんなところでぐずぐずと時間をつぶしていられない焦りがあったのではないかと思われる。一刻も早くパルマ公のフランドル軍と合流してイギリス本土へ上陸しなければならない。それがフェリペ2世から厳命されている作戦であり、その実践の先鋒にあったのが航海参謀を務めるディエゴ・フローレスだった。このディエゴを参謀に選んだ例ひとつをとってみてもフェリペ2世がいかに愚鈍な国王であったかの証拠だし、最大の失策だったと酷評する意見もあるが、それはともかく、ここに少し離れた位置から客観的に見ている人物がいた。艦隊輸送隊の事務長で遠征期間中さまざまに活躍したペドロ・ココ・カルデロンである。リスボンからコルーニャを経てスペインへ帰還するまでの詳細な報告を認(したた)めてくれているのだがこの事件の部分だけを抜いてみる。

「同日の5時、ペドロ・バルデスの旗艦が僚船「サンタ・カタリーナ」と接触し、船首斜檣を破損、前檣の策具が落下して主檣へ落ちかかった。バルデスは救助の信号弾を上げ、メディナ・シドニア公は船首を回し、他の船にも停船を命じた。バルデスも風上に向かって停船し、僚船何艘かとガレアサ2艘が救助のために帆を絞った。しかし高波のために太綱を渡すことが出来なかった。そこでメディナ・シドニア公は乗員を移すために小船を2艘送ったが、バルデスは船を放棄するのを拒否、船を修理できると主張するのだった。これをきいてメディナ・シドニア公は、本隊はすでにはるか先へ進んでいるので任せることにした。それから2時間後に砲声が2、3度聞こえた。ペドロの消息については敵に捕縛されたとしかわからない。この旗艦には兵卒128名、金貨5万ドゥカード、アントニオ麾下の兵卒122名、イバラ隊の20名その他が乗っていた[16)]。」

ここでは触れないが他の諸事情から、筆者カルデロンが極めて誠実な

人物であったことが分かっている。この報告にも事実だけが主観に惑わされない端的な筆致で述べられていると見ていいだろう。バルデスが信号弾をあげたことや、船の放棄を拒否したことなどが「航海日誌」にはなかった新しい事実として目にとまるが、メディナ・シドニア公が救援のために手を尽くした状況は的確に捉えてある。2 時間後の砲声についてはイギリス側の証言がある。それによると日没後、敵艦船 3 艘がおそるおそる近づいてきたところへ「ロサリオ」が断末魔のごとき砲撃を加えたのである。ただし 2 発だけでそれ以上の戦闘はなかった。救助の船はすでに離れ、「ロサリオ」は敵中に孤立したまま息を殺すようにして波に漂っていたと言う[17)]。

3.

これまでの報告から判断して、総司令官メディナ・シドニア公が事故船「ロサリオ」の救助を怠り、これを敵前に見捨てたと非難されるべき事実はまったく見あたらない[18)]。むしろスペイン艦隊総司令官として救助に万全の手を尽くしていると見える。しかしその反面、「そうではない、あれは見捨てたのだ」と記す報告書があるのも事実である。たとえばセビーリャ隊の艦長報告（匿名氏）は「ペドロの旗艦が船首斜檣を破損、操船が難しくなり、強い潮流に流された。前檣大帆が破れて操船が困難であった。作戦会議は船を放置するようにとのことであったがこれはまずかった」と記している[19)]。しかしメディナ・シドニア公が作戦会議を開いた事実は認められない。また事故船をたとえ放置したとしてもこれは救助活動を断念してからのことであり無為無策に見捨てたのではなかった。いまひとりの匿名氏によれば「これは僚船と衝突して船首斜檣を破損し、そのため前檣が主檣へ落ちかかって帆の自由がきかなくなったからである。救助されないまま残された[20)]。」これも正確には

救助できなかったと言うべきであろう。メディナ・シドニア公にたいする意図的な歪曲が感じられる。以上の報告はいずれも直接に目撃した事実ではなく、又聞きにもとづいて憶測を書き留めた節が感じられて証言としての価値はあまり認められない。しかし次のファン・デ・カルドーナからフェリペ2世への報告は凄まじい。

「遠征失敗の原因となった重大な事件ですので詳細に述べたいと思います。ペドロの船はメディナ・シドニア公のガレオン船の前に出て片側を進んでいました。すでにイギリス海峡へ入って敵艦隊が追尾してきておりました。ペドロの船が自分の隊の僚船と衝突して船首斜檣と前檣を破損し、後者が甲板へ倒れて主帆に落ちかかった。帆を絞って航行不能となり、ガレオン船と商船の脇を後ろへ残されていったのです。どの船も救助しようとはしませんでした。メディナ・シドニア公のガレオン船（総旗艦）が近くを通過したが公爵も救助しなかった。船首を沖へ回して帆を絞ることも縮帆することもなかったのです。また艦隊が進行を止めてペドロ・バルデスの船を待つように合図をあげることもありませんでした。メディナ・シドニア公のガレオン船と艦隊は、かの船を後に残して航進いたしました。メディナ・シドニア公が、救助すべきどうかディエゴ・フローレスに訪ねたところ、ディエゴは応えて、ペドロは親戚であり友人でもあるが陛下への奉仕が先である、あの船の救助にかかわると艦隊を危険にさらしてメディナ・シドニア公の破滅となる恐れがある。…ペドロのガレオン船を救助すべきであったのにメディナ・シドニア公はそうしなかった。…陛下への奉仕において誰が正しく、誰が間違ったのか、私には誰とは申せません。ただペドロの船を失った事件だけは大いに重要であったと思います[21)]。」

報告者カルドーナにとってこれはもう事故ではなく重大な事件である。この人物はレパント海戦の勇者であり、艦隊遠征の報告を直々にフェリペ2世から求められたほどに国王からの信頼が厚かった。イギリス遠征失敗の原因はそもそも事故船「ロサリオ」を見捨てた事件に端を発していると断言している。すでに述べたようにスペイン艦隊はドーバー方向へ130艘で三日月形の編成を組んで東進していた。この編成は当時の艦隊としては金城鉄壁の守りの編成であり、80艘ばかりのイギリス艦隊には手が出せなかった。三日月の両端の角（つの）へハワードとドレイクが攻撃を仕掛けてきたのでスペイン艦隊全体が方向を転じて風上へ対峙する形となった。総旗艦「サン・マルティン」の左舷を少し先へ航行していた「サンタ・カタリーナ」と「ロサリオ」の守備位置はレカルデ指揮の左翼後衛、つまりもっともイギリス海岸寄りの位置であるが、レカルデ隊がドレイクを追って西へ突出したので「ロサリオ」は後方へ残されることになった。そのすぐ後ろへ「サンタ・カタリーナ」がつけていた。総旗艦もハワード隊を西へ追っている。こうして編成隊の最後尾に近くに「ロサリオ」「サンタ・カタリーナ」の順に並んで西進する結果となっていたのである。もちろん不注意からであろうがこの2艘が衝突事故を起こし、「ロサリオ」が操船不能となって救助を要請したとき、すでに艦隊は再度旋回して針路を東に取って航進を始めていた。したがって航行不能となった「ロサリオ」を僚船が追い抜いて行く形となるのは確かである。風上（西）へ向いたままの「ロサリオ」を「どの船も救助しようとはしなかった」と言う。それはまだいいいとしても「総旗艦が近くを通過したが公爵も救助しなかった。…帆を絞ることも縮帆することもなかったのです」と非難している。これではメディナ・シドニア公が無慈悲に事故船を見捨て、まったく無関心に置き去りにしたかのような印象を与える。いかにも事実を歪曲した書きぶりである。実際、事故現場で

メディナ・シドニア公は、帆を絞ったし縮帆もした。もちろん合図の砲を撃ったし、ガレアサを派遣してロープを渡す手筈も怠らなかった。パタチェを送って乗員の救助も忘れなかった。総司令官としては考え得る限りの指令を下している。しかし折悪しく高波の強まったこともあって、巨大な艦船にマッチの軸のように群がる小船では手の施しようがなかったのが現実である。敵艦隊はすぐ目前に迫って数を増している。ドーバーから駆けつける敵と洋上で挟み撃ちに会う危険性もある。ここで時間を無駄にして艦隊全体を危険にさらしてはならないとする参謀長ディエゴ・フローレスの進言も一理あったと言える。

しかもこの参謀長ディエゴの執拗な主張には伏線があった。戦闘が開始される以前、スペイン艦隊がプリマス沖へさしかかったときイギリス艦隊の 11 艘が背後へ回り込もうと風上へ間切るのが遠望できたことは先に述べた。スペイン艦隊はここで帆を絞って速度を落とし、敵が風上へ立つのを阻止すべきであるとディエゴは進言した。行き過ぎてしまってから 130 艘の帆船がいっせいに方向を風上へ転じる作戦をとれば、その操作だけに 2 時間や 3 時間を要とする。それから敵との戦闘に入り、再度、針路を東に転じるとなればどれほどの時間を消費するか見当もつかない。パルマ公との速やかな合流を第一にするべしとのフェリペ 2 世の指令を遵守するディエゴはそれを懸念していたのである。今ここで縮帆減速して敵と対峙すれば旋回をしなくてもすむ。双方の間にこの作戦を巡って激しい議論のやりとりがあったが、結局、総司令官メディナ・シドニア公は、全艦に旋回を命じてイギリス艦隊と戦闘態勢に入る戦術を採用したのである。それではスペイン艦隊が分裂してしまうと言うディエゴの主張は退けられた。そのときの苛立ちを募らせていたディエゴには、またしてもここで舳先を巡らせて事故船の救助に向かうのは途方もない時間の浪費と見えたであろう。事故に気づかない他の艦船はすで

に遠くへ離れている。今、総旗艦が旋回して事故船にかかわっていれば、今度こそスペイン艦隊は分散してしまう。ここはどうしても譲れない。大幅な遅れを意識しているメディナ・シドニア公も今度ばかりはディエゴ・フローレスの主張に負けて個よりも全体を救う決断を下したのである。

メディナ・シドニア公とディエゴ・フローレスのどちらが間違ったのか、この報告書の筆者は明確な指摘は避けている。フェリペ2世もこの書簡を読み捨てにはできなかったであろう。だがフェリペ2世からメディナ・シドニア公を叱責する言葉はひとこともなく、爪の先ほどもその責任が追及されなかったことを思えば間違っていたのはディエゴ・フローレスということになろうか。事実、参謀長を努めたディエゴ・フローレスが後に責任を問われて6ヶ月のあいだ逮捕投獄されたことからもそれがわかる。イギリス派遣の作戦において責任ありとして投獄された唯一の人物であった。

4.

艦隊全体をあずかるメディナ・シドニア公が作戦全体の安全を図って取った苦渋の決断をたとえ理解できたとしても、あとに見捨てられた当該艦「ロサリオ」の司令官ペドロ・デ・バルデスの胸の内がおさまらないのは当然である。ドレイクに降伏してプリマスからロンドンへ送られたペドロが、事故から一ヶ月のちの1588年8月31日にフェリペ2世宛に書簡を認(したた)めている。本人の言葉を要約すると、「レカルデの船が2発被弾したのでピンネス（伝令船）を送って被害状況を尋ねた。前檣が破損して救助を求めてきたので船をそちらへ旋回させようとしたところへ僚船「サンタ・カタリーナ」が避ける間もなくぶつかってきて船首斜檣と帆桁を破損した。航行が難しくなり、破損箇所を修理するまえに別の

船がまたしても同じようにぶつかってきて船首斜檣と揚げ索と前檣大横帆を破損した[22]。」新しい事実として続けて2度の衝突事故を起こしていたのがわかる。これについてはどの報告書も触れていなかった。したがって2度目に衝突した船の名前も不明である。しかも「サンタ・カタリーナ」が衝突したと言うよりも旋回操作のミスで「ロサリオ」の方からぶつかって行った可能性が強いようである。なおもペドロ・デ・バルデスはフェリペ2世に言う。

「風上の位置なので前檣とその他を絞って修理をしやすくしました。そうやっている間に海が荒れ、船は帆を絞りしかも前檣の揚げ索を欠いていたので安定が悪く、大急ぎで作業をしなければなりませんでした。修理が終わる前に前檣が船室近くへ倒れ、主檣に落ちかかって修理に相当の時間を要することになってしまいました。相次いで2度にわたりメディナ・シドニア公へ報告を送り、大砲を3、4発撃ちました。艦隊は当方の状況を理解してくれ、ガレオン船かガレアサをやって先頭へ曳航するか、それとも別の針路を取らせるべきだとメディナ・シドニア公に進言してくれました。しかるに公爵は、当船のすぐ近くにいたにもかかわらず、そしてこちらの状況を目撃していて、しかも楽に救助できたはずなのにそうしなかったのであります。大砲を放って艦隊を集めると後続を命じ、陛下に奉仕する家臣にはあらぬかのごとく当船を置き去りにし、敵は4分の1リーグに迫っておりました。…数隻が接近してきましたが抵抗し、終日応戦いたしました。人道にもとる無慈悲な処置をとるはずがない、メディナ・シドニア公が援軍を送ってくれるはずだと翌日になってもまだ期待していました。こんな仕打ちは聞いたことがありません[23]。」

事故から一ヶ月を経過しているし、フェリペ2世への訴えでもあるところからペドロ・デ・バルデスは自分に都合のいいように言葉を選ぶ時間があったと考えられる。メディナ・シドニア公が意図的に「ロサリオ」を見捨てたと国王に印象づけようとしている節が見て取れるのは明らかである。荒波をついてメディナ・シドニア公がガレアサを派遣して曳航用のロープを渡そうとしたことや、パタチェを送って乗員の救助を図った重要な事実にはまったく触れていない。もちろんペドロがそれを知らなかったはずはないので意図的に口を噤んでいるのである。また、事故の夜に接近してきたイギリス船は「マーガレット」である。これに対して終日応戦したというのは事実ではない。放たれた砲弾は2発だけ。波が高くて乗り移るのを断念して「マーガレット」は去った。それ以後は鳴りをひそめて朝を迎えている。これはスペイン側の記録にもイギリス側の記録にも記されている事実で、自分をよく見せようとするペドロの虚偽が働いているのは間違いない。見捨てられたとペドロが主張する「ロサリオ」の運命が積み荷と乗員の身柄ともどもどうなったのかについては、本人が同じ書簡で次のように続けている。

「敵艦隊の提督ドレイクが船を近づけてきて、扱いを保証するから降伏をするようにと伝えてきました。生命と鄭重な扱いを保証するとの降伏条件を信じて相手の船に移りました。ドレイクは握手を求め、穏やかな言葉で接し、自分の手に落ちた以上は他の誰の手に落ちるよりも鄭重に扱うと約束しました。女王陛下もそれを望まれると言うのでした。これがわれわれの最善のそして最後の道と考え申し出を受けることにしました。翌日、提督（ハワード）のもとへ私を伴い、彼からも鄭重に遇されました。メディナ・シドニア公に見捨てられたのを気の毒に思ってくれているらしく、ドレイクと同じ約束をしてくれました。彼の隊に10

日いた後、ロンドンへ送られました。…女王はドレイクの乞いを入れて4リーグ離れたリチャード・ドレイクの邸にわれわれを預けました。そこで手篤くもてなされました。船の他の者たちはプリマスへ送られました。」

これは事実の通りである。ハワード提督から枢密院への8月1日（グレゴリオ暦11日）の報告で確認が取れる[24]。それによるとこの日、旗艦「リベンジ」と僚船「リューバック」それにバーク船の3艘でドレイクは、主檣を破損したペドロ・デ・バルデスを命の保証のもとに拿捕している。そして事故船「ロサリオ」とその乗員をダートマスへ送ったのである[25]。ただし、ドレイクは昨夜、「リベンジ」の船尾灯で僚船を先導するように指令されていたのに、それを消して右舷へ抜けて「ロサリオ」を探しに行った。そして翌朝、まんまと「ロサリオ」を拿捕して搭載していた金貨50,000ドゥカードを手に入れたのだった。ドレイクの抜け駆けに激怒したフロビッシャーが、後日、命令に違反して船尾灯を消し、わざと行方をくらませて財宝を手に入れたのだと激しく非難した。だがドレイクは不審船を見つけて追跡していたのだとするりと言い抜けている。追っていた船は翌朝になってドイツ商船だと判明したが、その実はドレイクの海賊根性が出たのかも知れない。フェリペ2世の書簡によれば、スペイン艦隊には食料調達、乗員の給料などに予備費として250,000エスクード（ほぼドゥカードに同じ）が何艘かに分散して積載されていた[26]。爆発事故を起こした「サン・サルバドール」にもその一部が積載されていたのだが、浸水のため船底から取り出せずに終わっている。一方、「ロサリオ」に搭載していた額は、記録により多少のばらつきがあるがほぼ50,000ドゥカード、捕虜への尋問でも52,000ドゥカードを収めた柩が2個あったと証言されている。ところがハワード提

督からウオルシンガムへの8月27日づけ正式最終報告では、「ロサリオ」の財宝は25,300と記載されている[27)]。残余の金貨はどこへ消えたのか？　船から移すときに誰かがくすねたか、それともドレイクが着服したか、あるいは陸揚げ時に盗まれたのか、いずれにせよ行方不明である。その他にも捕虜の貴族から宝石類や豪華な衣類を没収しているが、肝心の食料は腐った魚、蛆の湧いた肉、樽は水漏れ、酸っぱいワインが記録されている。だがイギリスにとって何よりも貴重な情報は戦艦「ロサリオ」の軍備状況であった。なにしろスペイン艦隊随一の花形戦列艦であるから、搭載している大砲を専門家が検分すれば自ずとその欠点も見えてくる理屈である。捕虜になったペドロ・デ・バルデスも見捨てられた腹いせのように貴重な情報をドレイクにしゃべってしまう。敵の思わぬ弱点を把握したハワードが、後にカレー沖からグラベリーヌの戦闘で大幅に作戦を転換してスペイン艦隊へ猛攻を加えることになった詳細は本稿の埒外であるが、不幸にして手の内をさらけ出してしまうことになったスペインにとって「ロサリオ」の拿捕は、50,000ドゥカードの端金に比べようもない損失であった。それだけにドレイクの手柄は大きかったのである。なおペドロ・デ・バルデスは1593年2月に身代金3,550ポンドで解放されている。48歳であった[28)]。

5.

結論として言うなら、スペイン艦隊総司令官メディナ・シドニア公は事故船「ロサリオ」に対して万全の配慮を尽くして救援に努めた。操船不能となって後へ残されていく「ロサリオ」に気づいたメディナ・シドニア公は、総旗艦「サン・マルティン」に風上へ転回して停船を命じ、他の船にも同様の指令を発している。それから風上へ敏捷に動けるガレアサを派遣して曳航用のロープを渡すよう下令した。艦隊の内部へ引き

入れて安全な位置で補修に努めるためである。しかし気象状況の研究からも明らかなように、折悪しく強まった西風と高波に翻弄されてロープを渡す作業が果たせなかった。ガレアサからすれば相手の「ロサリオ」は倍ほどの大きさがある。それがお互いに高波に持ち上げられ、次には甲板が隠れるほどに引き込まれる荒海で、しかも敵の攻撃をうけながらの作業である。ついに自らの危険を感じて救出作業を断念したとしてもガレアサに責めはない。それならば乗員の救出にと小型船パタチェ4艘の派遣が命じられた。1000トンを越す「ロサリオ」に20トン、30トンのパタチェが荒波をおかして接近しても、浮かぶ丸太にまとわりつく枯葉のようなもので取り付くことすらできない。これも果たせなかった。あとは日暮れを迎えてこのまま敵艦隊の面前で夜を明かし、明るい光のもとで天候の回復を待って救助するしかあるまい。そのとき航海参謀長としてフェリペ2世から信頼を置かれているディエゴ・フローレス・デ・バルデスが進言した。すでに日没も近く、この事故に気づかすに僚船の半分はすでに遠くへ航進している。敵地であるイギリス海峡で艦隊が分散するのは危険このうえない。ここは「ロサリオ」を断念して東へ航進を続けて一刻も早くフランドルのパルマ公の軍勢と合流すべきである。いや、是非ともそうしなければならない。スペイン艦隊遠征の成否はひとへのその一点にかかっているのであるし、それが国王フェリペ2世の意志でもあったはずではないか。時を無駄にすべきではない。参謀長はそう主張して決断を迫ったのである。たしかにディエゴの言い分にも一理ある。航海上の判断はすべからくディエゴ・フローレスの意見にしたがうようにとフェリペ2世から直々の指令を得て総旗艦へ座乗している人物である。フェリペ2世の意志を体現しているとも言えるディエゴの進言を無碍に退けることはできない。ペドロとディエゴは従兄弟同士であるのにもかかわらず仲が悪かった。そこでディエゴはこの機会に

ペドロを敵地に見捨てたのだと言う者もあるが、相手を殺したいほど憎んでいたわけでもないことを思えば質の悪い憶測にすぎない。むしろ身内を見捨ててでも艦隊の作戦遂行を採ったというべきであろう。

いまひとつ別の憶測がある。コルーニャを出撃するときの作戦会議でペドロ・デ・バルデスだけがメディナ・シドニア公を初めとする他の士官たちと意見を異にした。その経緯を報告してペドロは、フェリペ2世に「メディナ・シドニア公は私を良くは思っていません。深く傷つく言葉を言ったりもしました」と不服を述べている[29)]。この経緯は「航海日誌」にもそのままに記録されているとおりで、コルーニャ出撃を巡って意見の対立があったのは確かである。しかしそれを恨みに思って総司令官メディナ・シドニア公が「ロサリオ」を見捨てるような愚行をおかすとはまず考えがたい。大砲50門と火薬そして5万ドゥカードの金貨を搭載しているばかりか、ペドロ・デ・バルデスの身柄はもとより乗員400名の命がかかっているのである。しかもスペイン艦隊の主戦力をなす優秀な戦闘艦である。救助できればそうしたかったのが総司令官の本音であろう。

総旗艦の舳先をふたたび東へ転針させたメディナ・シドニア公の胸のうちを推し量る記録はない。争いを好まない温厚な性格で誰からも好かれる人柄であったと言われるだけに、窮地に陥った「ロサリオ」を無慈悲に見捨る指令を簡単に下達するとは考え難い。他船から眺めていた士官や兵隊たちには、総旗艦の甲板でメディナ・シドニア公を中心に繰り広げられている救出劇が見えないだけに、いかにも事故船が見捨てられたように見えたかも知れない。そして「ロサリオ」ほどの主要艦が見捨てられるのなら、自分たちのごとき小さな船が窮地に落ちたときは、当然のこと救ってはもらえないと感じて艦隊全体に戦慄が走ったと言う。これは「ロサリオ」を見捨てたと主張するカルドーナの感想であって客

観性はない。むしろ矢継ぎ早に指令を下す総司令官の身近にいたバネガス艦長や執事長カルデロンなどは、目撃していた救助作業を的確に書き留めている。これらの報告の内容にこそ信憑性があると言えるだろう。

イギリスに曳航されていった「ロサリオ」はその後しばらく補給船として使用されていたが1618年にチャタムで沈められて埠頭の防衛に供せられた。もともと「ロサリオ」は新大陸航海用にとガリシアのリバデオで建造された船で艦船ではなかった。砲撃を主体とする戦術に転じてよりイギリス艦隊は、前楼、後楼を取り去って風の抵抗を少なくし、乾舷の低い細身で軽い船体にして風上への操船性を向上させていた。それが見事に成功してスペイン艦隊はイギリスの艦船をまったく捕らえることができなかった。それを思えば船足の遅い鈍重な従来型の大型スペイン商船「ロサリオ」は輸送船にしか使えなかったのである。しかもついには遮蔽物として湾口に沈められた末路は哀れとも言える。なお火災船「サン・サルバドール」はウエイマスからポーツマスへ曳航される途中に沈んだ。

メディナ・シドニア公は無能な司令官、臆病な司令官であったからバルデスを救えなかった、見捨てたのは無能だからである、臆病だからだとする説が後世に立てられた。これの反証には別稿を要するが、見捨てたと言い立てているのはペドロ・デ・バルデスとカルドーナのみであることに注意しておかなければならない。すでにメディナ・シドニア公の「航海日誌」やバルデス、カルデロンの報告書を熟読していたフェリペ2世がどちらを信じたかは推して知るべしであろう。サンタンデールへ担架で担ぎ上げられたメディナ・シドニア公にフェリペ2世は、労をねぎらう言葉をかけこそすれ、遠征失敗には何らの咎めもなかったのである。

# 注

1) スペイン艦隊は単に「艦隊」あるいは「大艦隊」そして宗教がらみで「いともめでたき艦隊」とよばれた。1588 年 9 月に出たバーグレイ卿のパンフレットである「*The Copie of a Letter Sent out of England to Don Bernardino Mendoza*」が次の言葉で締めくくられている。So ends this account of the misfortunes of the Spanish Armada which they used to call “INVINCIBLE”. スペイン人は “INVINCIBLE” の呼称を使わなかった。だがこれがフランス、イタリア、オランダ、ドイツ語に訳されて皮肉な呼び名「無敵艦隊」が広まったのである。*The Spanish Armada*, Colin Martin and Geffrey Parker, Mandolin, 1999.

2) 北極海とグリーンランドを吹く冷たく強い風と大西洋亜熱帯の暖気流とが拮抗して北西ヨーロッパの複雑な天候を生み出しているのだが、1588 年のスペイン艦隊出撃中の夏から秋にかけての長期にわたる天候不順は予測不可能の異常現象であった。*A Meteorological Study of July to October 1588: The Spanish Armada Storms*. K. S. Douglas, H. H. Lamb, C. Loader, University of East Anglia, Norwich, 1978.

　シーモアからウオルシンガムへ 7 月 12 日の書簡にも「このような夏は初めてです。南の風にのって幾度もカレーへ渡ってきたが、海岸へ向かうにも嵐と方向の定まらない風のせいで針路が固定で きなかった」とある。*THE GREAT ENTERPRISE, The History of the spanish armada*, p. 98, Stephen Usherwood, Bell & Hyman, London, 1982.

3) 1580 年から 1584 年の凶作によってカスティーリャの小麦事情は難しくなっていた。1585 年 5 月からのイギリスとオランダ船の差し押さえでヨーロッパからの小麦輸入も減少していた。補給態勢の厳しい背景でイギリス遠征が計画されていたし、このような状況のもとでセルバンテスは小麦の調達役人としてアンダルシアを駆け巡っていたのである。

4) 1580 年にスペインはポルトガルを併合していたので艦隊出撃はリスボンから実行された。大西洋岸に常駐基地をもたないスペイン艦隊がイギリスへ遠征するには少しでも北よりの港が好都合である。大量物資の補給、軍需物資の調達などの兵站関連の便宜さからリスボンが出撃基地となった。なおコルーニャ出港を巡る作戦会議の記録ならびに航海の様子は以下に詳しい。

　*ARCHIVO HISTORICO ESPAÑOL, La Armada Invencible*, 130. Enrique Herrera Oria, S. J, 1587–1589.

　*Calender of Letters and State Papers, Vol. IV. Elizabeth, 1587–1603*. 326, 334, 350. Martin A. S. Hume, London, 1899.

5) Martin A. S. Hume, *ibíd*., 391, 402.

*LA ARMADA INVENCIBLE*, 185, Cesáreo Fernandez Duro, 1885, Madrid.

6) *THE GREAT ENTERPRISE, The History of the Spanish Armada*, p. 100. Stephen Usherwood, Bell & Hyman, London, 1982.

7) *Ibíd,*. p. 109.

8) Martin A. S. Hume, *ibíd*., 402.
Cesáreo Fernandez Duro, *ibíd*., 185

9) Cesáreo Fernandez Duro, *ibíd*., 165.
Martin A. S. Hume, *ibíd.,* 402.

10) Cesáreo Fernandez Duro, *ibíd*., 185.

11) 16 世紀当時、船のトン数は正確な計測が不可能に近い。積載トンと排水量トンとの混同があり、スペイン国内でも地域によって計測単位が異なっていた。またイギリスの計測トン数よりも 20% 増しの数字なのでスペイン艦船の方が総体に大型に見えるが実際には双方に大差はなかった。

12) Martin A. S. Hume, *ibíd*., 383.

13) ウエイマスでの調査でワイン樽 53、豆 1 樽他、甲板の死体 12、生存者にドイツ婦人ひとりが記録されている。艦隊に女の乗船は厳禁のはずだが、ここに記録されているところをみると実際にドイツ人砲術士の妻が乗船していた可能性が高い。

14) *The Enterpraise of England, The Spanish Armada*, p. 109, Roger Whiting, Alan Sutton, 1988.

15) Cesáreo Fernandez Duro, *ibíd*., 169.

16) Martin A. S. Hume, *ibíd*., 439

17) 「ロサリオ」の衝突事故に次いでオケンド隊の「サン・サルバドール」が 200 名を越える死傷者を出す爆発事故を起こしているのだが本稿ではその詳細には触れない。

18) グラン・グリフォン、650 トンの匿名記録者が「救助されないまま残された。その夜、敵が拿捕し、われわれよりも親切なことに、ペドロをロンドンの女王のもとへ送り、他のひとびとは方々に分散されたと聞く」とやや皮肉な調子で記している。ただし救助できるところを見捨てたとは言っていない。Cesáreo Fernandez Duro, *ibíd*. 171。

19) Cesáreo Fernandez Duro, *ibíd*., 170

20) *ibíd*., 171.

21) Enrique Herrera Oria, S. J, 1587–1589. *ibíd*., 192.

22) すべての報告において「ロサリオ号」の破損部分が船首斜檣と前檣であることが見事に一

致している。事件が伝わるに際して船乗りとして関心のある衝突部分とその被害の大きさだけは寸分の狂いもなく末端にまで伝わって記録されているのがわかる。

23) 「アンダルシア隊司令官ペドロ・デ・バルデスからフェリペ2世へ」、Stephen Usherwood, Bell & Hyman, p. 162.

24) 1582年にグレゴリオ8世がグレゴリオ暦を施行した。1588年の時点でカトリック国はすべてグレゴリオ暦であったが、イングランドとプロテスタントのドイツはユリウス暦を使用し続けていた。グレゴリオ暦ではユリウス暦の日付に10日を足さなければならないので注意を要する。

25) Stephen Usherwood, Bell & Hyman, *ibíd*., p. 114

26) Enrique Herrera Oria, S. J, *ibíd*., 99.

27) Stephen Usherwood, Bell & Hyman, *ibíd*., p. 150

28) ブリュッセルに滞在して最終的にスペインへ帰国したのは1594年初夏。1602年にキューバ総督に任ぜられ1608年に引退して1614年にヒホンで死亡している。

29) Cesáreo Fernandez Duro, *ibíd*., 133.